

第2回 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）

1. 開催日時・場所

- ・ 日時：平成27年12月16日（水）13:30～15:30
- ・ 場所：中央合同庁舎7号館5階 5F1会議室

2. 出席者（別紙のとおり）

3. 配布資料

- ・ 配席図
- ・ 【資料1】文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）
- ・ 【資料2】報告書骨子について

4. 検討会での発言等

事務局の挨拶及び委員の紹介後、事務局から、資料1について連絡。その後、優良事例のヒアリングを行った。以下、その要約。

【竹本臨時委員】

- 田辺市は5つの市が合併した近畿地方で1番広い市。平成17年の合併後、観光資源・地域資源を数多く持つことができたが、代表的なのが熊野古道である。世界で12番目に世界遺産に登録された熊野古道などの資源を活用しながら、田辺市の総合的なプロモーションをやろうと立ち上がったのが（田辺市熊野）ツーリズムビューローであり、熊野古道を核とした観光のプロモーションをずっとやっている。
- 1市2町2村が合併した田辺市には5つの観光協会があったが、それぞれが持つ観光資源の売り方が異なり、また観光以外の地域の祭りやイベント等担う役割もあるので5つの観光協会は残したまま、ツーリズムビューローを組織し、新たなプロモーション団体をということで立ち上がった。
- 立ち上がったときに基本スタンスを決めた。1つ目がブームよりルーツ。なぜ世界遺産になったのか、先人が残してくれた歴史・自然・文化、そういったものを大切にしたい観光をしましようというのが1つ目。
- 2つ目に乱開発より保全・保存。3つ目にマスより個人。目的意識を持った個人のお

客様をターゲットにした観光を進めましょうと。4つ目に世界に開かれた上質な観光地。これらを総称していわゆるサステナブルツーリズムというものを目指していこうと考えた。海外の方が日本に来たとき、日本語の文字しかない、説明版がないということは、われわれがアラビア語の標識を見ているのと同じ感覚だと気付くことがインバウンドを考える上で大切だと考えた。

- ネイティブの目を持って情報発信しようと考え、JETプログラムでALTとして3年間過ごしていたブラット氏を設立当初から雇うことにした。整備にあたっては、いくつか種類があるローマ字のうち、外国人が学んでいるへボン式を採用し、例えば「大塔」の表記は「Oto」に、「熊野本宮大社」にも19通りの標記があったので1つに統一した。情報発信では多言語のパンフレットを作成し、日・英・仏・中・韓・スペインの6言語で対応している。また、情報発信以上に現地のレベルアップに力を入れた。60回以上のワークショップ等を重ねたが、観光関係者を一堂に会すのではなく、事業者ごとに課題が違うことを考慮して例えば宿泊関係者だけを集めたセミナーを実施した。
- そのセミナーから生まれたのが「指差しツール」。このツールは、セミナーを実施する我々（ビューロー）から、「こんなツールを作りましょう」と投げ掛けるのではなく、参加された事業者から出された意見で作成されたものである。これはそれぞれのお宿から伝えたいことを挙げていただいて、それを英訳するという形を取ったので、それぞれのお宿によって内容の違うもの。
- エリアマップについては、奈良県十津川村のマップも作成している。本来、自治体を超えると作成しにくいのだが、熊野古道は三重、奈良にもつながっているので、観光客から見れば自治体の違いは関係ないだろうと考えた。同様に、バス会社ごとの時刻表も、5社まとめた形で作成している。これらは日英併記である。
- 看板も様々な表記のものが乱立しており、海外の方には熊野古道の「古」に着目してプラスとボックスを目指せば迷わないと案内していたが、中には「この道は熊野古道ではありません」という看板もあり、まずは田辺市周辺の熊野古道の看板を全て、色をこげ茶に、素材を木に、表記を日英併記に統一した。ただしこれも田辺市を出るとまた違う看板があり、看板の統一というハード整備については行政の力がなくなかなかできない。
- 表記の統一のほか、直訳ではない、海外の方に分かりやすいような表記にしたり、音声ガイド等を会話方式にしたり、お客様が使いやすいようなシステムをとっている。

【アトキンソン委員から竹本臨時委員への質問】

- 人口等を考えるとスペインとフランスよりもドイツの観光客の方が多いが、ドイツ語で翻訳していない理由はあるか。

【竹本臨時委員】

- ⇒ まずは英語をベースにし、インバウンドの数（どの国からの来訪者が多いか）を考えた。また、スペインとはサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼道と共同プロモーションをしている関係で、スペイン語にターゲットを絞っている。

【野田委員から竹本臨時委員への質問】

- スペインの巡礼の道との対比において、熊野古道の精神性・歴史などをどのように情報発信しているのか。

【竹本臨時委員】

- ⇒ 対比ではないが、スペインでサンティアゴを歩かれた方は熊野古道も歩いてくださいということで、共同で巡礼手帳というものを始めた。情報発信はまずネットで、展示も全くの直訳ではないので、読んでいただければ熊野古道を一から理解できるようになっている。

【稲葉臨時委員】

- 旧宝物館は、今から40年前、350年祭を記念して作ったが、老朽化や東照宮のみの参拝客にとって分かりづらい場所にあり、入館者が多くないという課題があった。今年日光東照宮400年式年祭、50年に1度の式年大祭の年に当たるということもあり、記念行事として現在の宝物館を平成27年3月13日に開館した。
- 映像やカフェ、展示開設やサインを基本的に日・英の2か国語で表記したのが旧宝物館との違い。入館者は3月のオープンから11月末の時点で約16万人と大幅に増えている。東照宮を紹介するコーナーには実物のものを用い、日英2か国語で表記している。
- 東照宮について理解を深めていただくために「ワンダフル東照宮」という映像を作成している。外国のお友達を日本人の女の子が案内するというもので、無声で音楽のみが流れているもの。ほかに杉並木の紹介、東宮の代表的な祭事である千人武者行列の解説があり、これには日本語のナレーションと英語のテロップを入れている。家康公が関ヶ原の陣で御着用された南蛮胴具足の展示解説も日英2か国語
- 家康公の御生涯を描いた東照社縁起5巻をデータ化して全て見られるようにしている。このデジタル化した絵巻は、日英2か国語を選んで、主要な場面をタッチすると解説が出てくるという仕組みにしている。

- 宝物館は外国の方をお出迎えするのにふさわしい施設ということを考えて作ったが、境内の方はまだ英語のサインが進んでいない。音声ガイドは導入しており、ホームページも英語表記しているが、これらの英語解説はアトキンソン委員にお世話になっている。

【リンネ委員から稲葉臨時委員への意見】

- 博物館も展示替えが多く、英語対応を迫いつかせるのが難しい。作品保護の観点から、歴史を解説する1番大切な作品をずっと出しておくわけにはいかないので、デジタル化してその場で見られるようにすること、また、時間のない観光客も多いのでインターネットに掲載し家に帰っても勉強できるようにするのが理想かと思った。

【稲葉臨時委員】

- ⇒ 江戸時代には大名がお参りに来た際、東照社縁起と南蛮胴具足がまず見せてもらいたいものだった。一般の来館者もこれを目的に来る方がいるので、全てを展示しておくことはできず、また長い絵巻なので場所が限られてしまうが、デジタル化すれば全ての場面を見せることができる。宝物館には1,200点収蔵品があるが現時点では200点をデジタル化して保存し展示に役立てる取組をしている。

【平岡委員から稲葉臨時委員への質問】

- セット券は新宝物館でも売られているのか。16万人という入館者の数は大人と小中学生で割合はどのくらいか。

【稲葉臨時委員】

- ⇒ 新宝物館でも売られている。子供の割合は大体5万人くらいと集計している。

【長崎課長から稲葉臨時委員、アトキンソン委員への質問】

- このようなすばらしい施設を作ろうと思った動機、推進力は何か。
- 英語の解説を監督する際、外からの人に理解していただくよう工夫した点は何か。

【稲葉臨時委員】

- ⇒ 動機の部分だが、老朽化してしまったので新しい施設必要だということで、その収蔵を完璧なものにするために技術を集結して作る必要があるだろうと。それだけのものを預かっているということが動機であり推進力。

【アトキンソン委員】

- ⇒ もともとの日本語の文章を1度翻訳していただいたものに修正等したが、1から書き直した方が早かった。ネイティブだからといって全員がネイティブチェックをでき

るわけではない。だらだらとしたものは誰にでも書けるが、例えば熊野古道のエッセンスを1行で言いなさいと言われると、相当勉強して基礎知識がある人でないと答えられない。家康公の一生を基礎知識が全くない人に対して説明するというのが1番苦勞し、工夫したところ。

【松山臨時委員】

- 禅の教えに不立文字という、物事の神髄は文字で表現できないという言葉がある。観光に関して、以前は seeing, 物を見るという観光が主流だったが、舞妓さんの体験など何かをやってみたい, doing, という流れになっている。さらに進み, being が最近の観光のトレンドの1つではないか。旅の中に精神性を求めるということ。
- 妙心寺は門前に土産物屋が1軒もなく、わざわざ敷居を高くしてやる気のある者以外来者などというのをずっと守ってきたところ。パンフレットも日英併記しているが、日本人でも外国人でも変わらず、最低限の説明でよいと思っている。
- 本当に大事なことは言葉で表現しても伝わらない。少数でもいいので自分たちの教えを受け継いでくれる人, その価値を分かってくれるファンを増やすことが私たちの役目。今の京都の現状はキャパを大幅に超えてしまっている。You are welcome. ではなく You are allowed. という態度ではないと大事なことが伝わらないのではないか。
- ちゃんとお会いして, あっと気づいていただいて, そして何回も来てくれる方は外国の方もいる。距離や時間は関係ない。一人一人とちゃんとお話しができるわけではないので, そこは御縁とやる気の問題。昨今では何かあるとインバウンドの数が波になるが, 本当のファンであれば何があってもちゃんと来てくれる。

【高野委員から松山臨時委員への質問】

- 年間に何名までくらいなら, そういうことができるか。

【松山臨時委員】

- ⇒ 数の問題ではなく, その人にやる気があるかどうかの問題。やる気のある小学生, 中学生が修学旅行で毎日 400 人くらい来たいと言ってもそれはオーケー。実際, リピーターとなる先生もいる。

【リンネ委員から松山臨時委員への意見・質問】

- 経験の質, 高質ということが大事, quality experience。どの国ということではなく, どんな人が来ても, 日本の心を味わえることが大事なこと。
- 博物館でも最近の傾向は解説を短くすることだが, 行ったときに接する情報が少しでも, ほかの方法でもっと知りたい方は情報を得られるということのも大事ではないか。

【松山臨時委員】

⇒ 老若男女，国籍を問わず，やる気とご縁を大事にしている。そうしないと，長期的なつながりもできない。

⇒ 博物館にあるアートは education にはなるが value はそこには付かないと思う。大事なものをこそ使ってもらい，触ってもらう。蔵にしまうのではなく，分かる人に使ってもらいたいということで，来ていただいた方にやってもらうことにしている。

【アトキンソン委員】

○ 観光の1番のポイントは多様性なので，いろいろなスタイルがあっても然るべきだと感じた。「最低限」が（松山臨時委員のプレゼンの）ポイントだと思うが，ゼロは最低限ではないと考える。量ではなくて，内容のエッセンスという話だと思うが。

【落合委員】

○ 竹本臨時委員の説明の中に熊野本宮大社の表現統一の話があったが，ほかの神社についても同じことがいえる。用語を統一していただき，最低限こういう用語を使った方がいいという統一的なものがあればよい。

○ ボタンとシャクヤクは辞書で引くと同じ英語だが別物。自分のところにあるものはより正確に伝えられるような単語帳を作って努力しようかと思っている。

○ 見るだけではない参加する観光があってもいいと思う。蔵の中から火縄銃が出てきたとき，これを展覧会に貸し出し，手に持ってもらおうということをして成功した。

○ 神社では日・英・中の音声ガイドを導入している。あと1，2年でもとをとれるのではないかと思っている。

【木脇委員代理】

○ 自然豊かなことを魅力にしている場所に行ってみたら人がたくさんいて本来の魅力が失われていることがある。コントロールするという気持ち，ふさわしい人に来て欲しいということは非常に大事な姿勢。

○ 寺社仏閣が目立つ看板や多言語解説で雰囲気を失うことがあれば本末転倒なので，音声ガイドのような形がいいのではないか。必ず一定の時間をとられてしまうというマイナス点もあるのでそれぞれ良し悪しであるが。

○ 博物館や美術館で悩むのが，展示の字が小さくて読むのに苦労するという。多

言語で表記すると字が小さくなってしまふ，これをどのように見せるかが今後の課題ではないか。小さいガイドブック，音声ガイドを使うということもありかと思う。

【内町委員代理】

- 京都の現状について，確かにシーズンになると観光バスが来すぎてしまふ。観光案内標識についても景観など厳しい環境にあるため，物理的な表示は限界がある。ICTを活用して，いかに日本に来られた外国人の方にスムーズに観光していただくか，その手法について非常に参考になった。

【アトキンソン委員】

- 最低限という話に関連して，先日二条城に行った際，案内板がいきなり増えていた。壁画に竹と虎が描かれていると書いてあったがそれは見れば分かる。竹と虎をなぜそういうところに描くのかという解説がないと満足度にはつながらない。

【野田委員】

- 観光資源として考えたとき，興味のある，分かっている人だけ来てもらえばいいというのは難しい。折り合いをどうつけるのか。

【松山臨時委員】

- おもてなしとサービスは違う。おもてなしは主客同等。お互いのマッチングがなければ，こちら側が頑張ってもサービスになってしまうので，そこをちゃんとしていきたい。

【アトキンソン委員】

- こういうことを理解してもらいたいというのが強く出すぎると，解説の方では困るなどと思う。

【野田委員】

- 精神性を押し付けるということではなく，観光には多様性があるということ。引っ張ってくる側の関心度合いが1つポイントになると思うが，いろいろなものを組み合わせさせてやっていく。入口を少し広げて，排斥しているわけではないということだが，もう少しウェルカムの部分があってもいいだろうと。

【松山臨時委員】

- 最近ムスリムの人が多いのだが，偶像崇拝禁止なので本堂の前でお参りはされない。それはそれでよいと思っており，私たちのお寺ではみなさんのためにお祈りの部屋もちゃんと設けている。コンパスを中に置いて，周りから見えないところでござを敷いて，ムスリムの方がお祈りできるようなスペースも設けている。

【野田委員】

- そういうことがもう少しオープンに分かるようになっていけば、非常に広く受け入れるのだという気持ちがそれで伝わるのではないか。

【高野委員から竹本臨時委員への質問】

- 熊野古道は欧米豪を中心に考えているとのことだが、何かの基準でほかを断っているわけでもなく、たまたまそういうふうになっている。それがうまくまわっている例かと思うが、何か工夫のようなものはあるか。

【竹本臨時委員】

- みなさんも一緒だと思うが、特定の人はいらないということではない。どういう方々に受けるのか、どのからのお客さんが多く、どういうことを目指しているのかをアンケートをした後に、ではそういう方をターゲットにしようということ。
- ブラッド氏がよく言うことだが、訳すにあたり、1から直訳するのではなく、自分がわかった上でないとなかなか訳せない。翻訳される方の知識量が大事だと思った。

【高野委員】

- サイエンスにもサイエンスコミュニケーターという、サイエンティストの話を噛み砕いて自分の話として話せるコミュニケーターがいるが、おそらくこの分野にもそういう人がいるのだろう。

【稲葉臨時委員】

- 翻訳にあたって、展示設計の方もプライドを持っており、翻訳についてもネイティブだと。それをわれわれが1番信頼する方に最終確認いただくのだが、その調整が非常に大変。建築もそうだが、余計なサインを入れるとも言われる。文字の大きさも、小さいと自分も思うがせめぎあいがある。
- われわれもどんな方でもたくさん来てもらえればいいという考え方ではないといいながら、やはり御祭神のことをよく知っていただきたいと思う。日本人の家康公の評価も覆したいということがあり、アニメのストーリーやキャラクター立てを考えた。ただの展示施設ではなく、メッセージが込められた施設であるということは忘れてはならないと思っている。

【岩橋委員】

- 現場にはいろいろな要望があり、観光客ではなく参拝客が欲しいという要望、実際にそういうところに観光客が行くという現状、そういうところにも対応していく必

要があると感じた。

この後、事務局から報告書骨子案についての説明。

以上

別紙 第2回会議 出席者一覧（敬称略・50音順）

<委員>

小西美術工藝社 代表取締役社長 デービッド・アトキンソン

神社本庁 教化広報センター 広報国際課長 岩橋 克二

自治体国際化協会 JETプログラム事業部 プログラムコーディネーター エリック・スミス

国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系教授 高野 明彦

全国社寺観光連盟 理事 野田 博明

日本観光通訳協会 副会長 木脇 祐香里 （代理）

東大寺 執事長 平岡 昇修

京都市 産業観光局 観光MICE推進室 受入環境整備係長 内町 敏孝 （代理）

京都国立博物館 フェロー国際交流担当 マリサ・リンネ

<臨時委員>

田辺市熊野ツーリズムビューロー 事務局長 竹本 昌人

日光東照宮 権宮司 稲葉 尚正

妙心寺退蔵院 副住職 松山 大耕

<文化庁>

文化庁 文化財部長 村田 善則

文化庁 文化財鑑査官 齊藤 孝正

文化庁 文化財部伝統文化課 課長 大谷 圭介

<観光庁>

観光庁 観光地域振興部長 加藤 庸之

観光庁 観光資源課 課長 長崎 敏志